平成25年度調査報告―近世資料に現れる中世―

松本市教育委員会の宮島義和です。よろしくお願いします。

現在、殿村遺跡の発掘調査は順調に進んでおりますけれども、その一方で私たちはまだ地元に眠っているいろいろな文書や絵図などの資料の掘り起しや、あるいは地域にお住まいの方から四賀の昔のことについてお話を伺うなど、所蔵資料調査とか聞き取り調査と私たちが呼んでいる活動を、皆さんのご協力のもとに行わせていただいています。そこで、今年はちょっと趣向を変えて、所蔵資料調査の途中経過を報告させていただきたいと思います。

「近世資料に現れる中世」ということで、現在私たちは殿村遺跡や虚空蔵山の城跡など中世の遺跡を追い求めております。基本的に文献資料も中世のものがあればよいのですけれども、なかなか江戸時代より前のものは残っていない場合がほとんどでありまして、中世以前の資料をみつけるのは大変難しいのです。しかし少し時代のすそ野を広げると、例えば図1に示した安政6年（1859）8月に書かれた日記、これは四阿山の遷宮について地元の人が描いた虚空蔵山の絵図ですが、こういったものが思わず見つかることがあるの

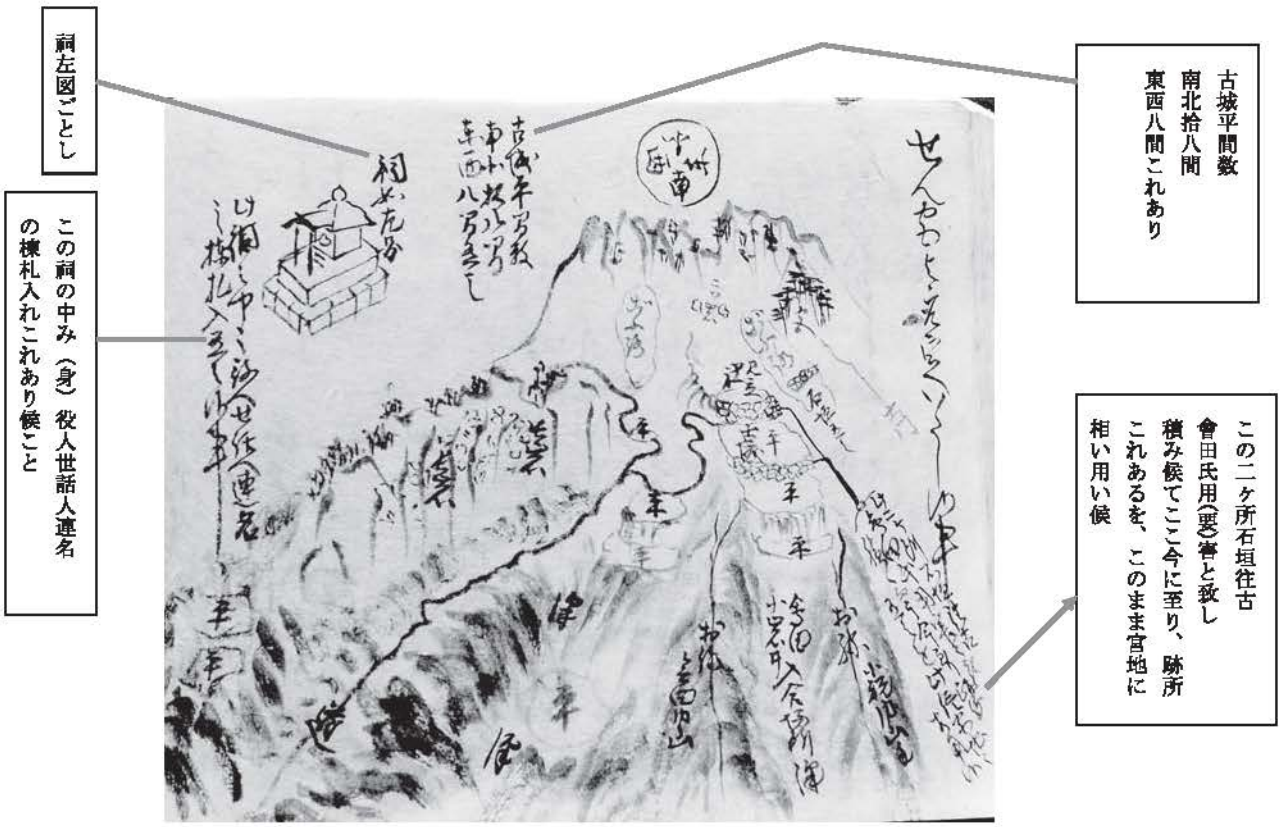

図1　安政6年虚空蔵山絵図（堀内健氏蔵）

です。図には「古城」というふうに書かれております。多分中ノ陣のことを示していると考えられるのですが、これは江戸時代の人が描いた虚空蔵山の絵の中に中世の遺構、城の跡が現れているという例であります。平、平、平とあります。これが会田小次郎の要害ではないのかというふうに書かれておりますけれども、このようにして時には意識して、時には意識をしないで中世の面影が近世の資料の中に残っている場合があるのです。今日はこのように近世の資料に現れる中世の姿について、調査資料の中から特に興味深い2点にしぼって取り上げさせていただきたいと思います。

図２は「堀内家文書」の中の、前回笹本先生の講演の中でご紹介をいただいた「お祓い配り日記」という古文書の表紙です。表紙の字をそのまま書き表しますと、「志奈の国道者之御祓く者里日記　天正九年かのと能ミ能とし　宇治七郎右衛門尉久家（花押）　かみ数廿八枚とし申し候」となりますが、これを現代語に直しますと「信濃の国道者のお祓配り日記　天正９年（1581）辛の巳の年　宇治七郎右衛門尉久家（花押）　紙数28枚とじ申しそうろう」となります。これが私たちの会田に残る非常に価値の高い中世の史料であります。時期は「天正九年」と書かれておりますので西暦に直しますと1581年、なんと会田氏が滅亡する１年前に書かれたものです。そしてこの中でちょっとした発見がありました。

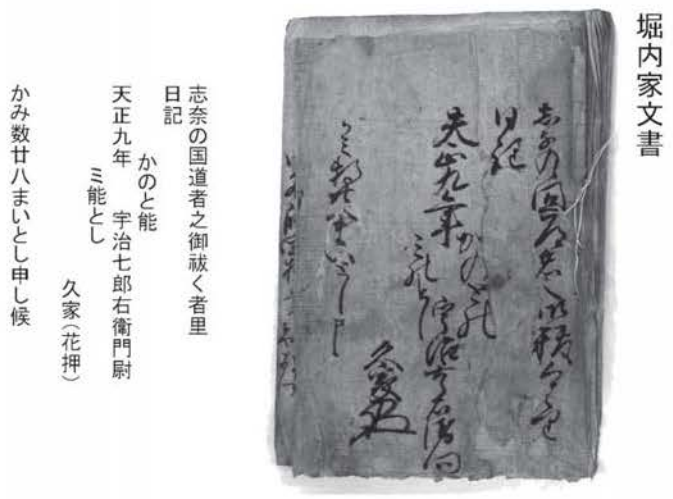

図２　お祓い配り日記の表紙

これは「お祓い配り日記」の一部に過ぎないのですが、この中にたくさんのお寺の名前が出てきます。「あい田分」と書かれております（図３）。まず知見寺と書かれている部分ですが、このお寺はご存知でしょうか。知見寺沢、字知見寺という字名が今も残っています。かつてこの会田には知見寺というお寺があったと言われておりますけれども、この史料から知見寺が戦国時代には実際に存在していたことがはっきりと分かります。宇治七郎右衛門尉が伊勢神宮の旦那それぞれにお土産を渡してお札を配り、お金をもらってくるわけですが、「お祓い配り日記」は各旦那に渡してくる物のリストになっています。お土産の内容には格差があります。例えば知見寺ですとお土産は「茶十袋、あおのり、ふのり」をもらっています。これが知見寺の待遇ですね。次は皆さんご存知のとおり長安寺です。残念ながら今年建物は倒壊の危険があるため解体されてしまったわけですけれど、長安寺は何をもらっていたかというと、やはり「茶十袋、あおのり、ふのり」ですね。それから「ふた寺」ですがこれは補陀寺のことですね。この名前はご存知の方が多いと思いますけれど、幕末まで旧会田小学校の体育館周辺にあったお寺です。補陀寺は何をもらっているかといいますと、やはり「茶十袋、あおのり、ふのり」なんですね。そして、その隣です。「むれう寺」これは無量寺のことですね。で

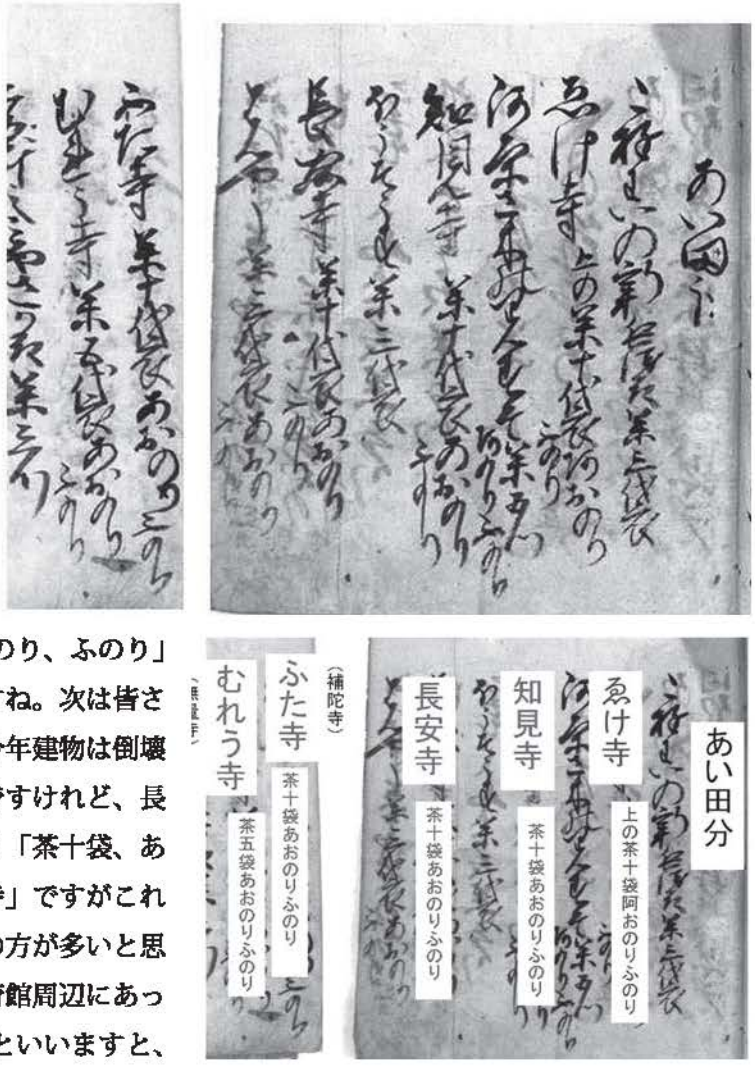

図３『お祓い配り日記』に記された会田の寺
（松本城管理事務所蔵）

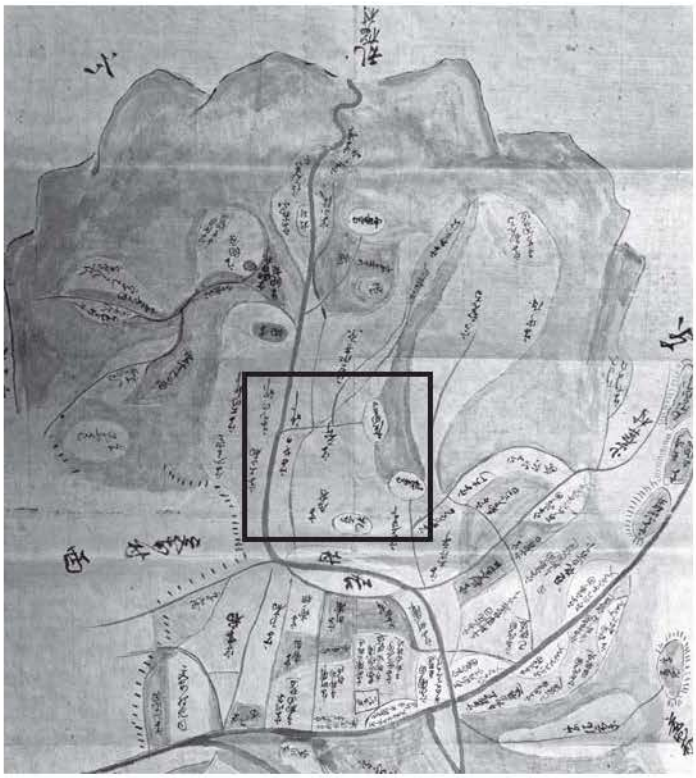

図４　信濃国筑摩郡会田町村絵図（大河内忠則氏蔵）

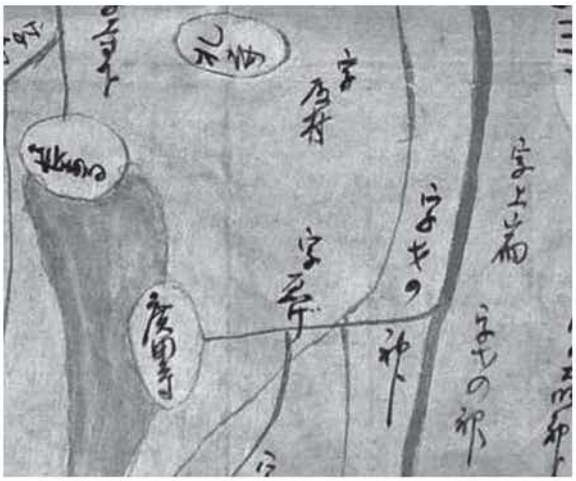

図５　殿村を囲む寺と字ゑげ

は無量寺はどれだけもらっているかといいますと、茶は５袋になっていますけれど、やはりあおのり、ふのりをもらっています。

ところが、私たちがこの「お祓い配り日記」を見た時に謎だったのが、ここに「ゑけ寺」という寺の名前が出てくることです。えけ寺あるいは当時のかな使いではえげ寺と読む場合もあったかもしれないですけど、このお寺についてはなんの知識もありませんでした。そして驚くのはお土産の内容です。「上の茶十袋」なんですね。実は会田の中で上の茶をもらっているのは、会田の領主と言われる「岩下殿」とその隣に名前が書かれている「岩下筑前守殿」だけなんです。ということはこのゑけ寺という寺はかなり格の高い寺だったと考えることができると思います。

しかしこのお寺、現在は影も形もありません。いったいどこにあったんでしょうか。同じように現在は存在しない知見寺の位置もはっきりしませんけれども、地名や言い伝えから知見寺沢のどこかにあったであろうことは容易に想像ができます。まったく手がかりを得ませんが、知見寺から一つ尾根を越えて、長安寺、補陀寺、無量寺はいずれも殿村遺跡と同じ岩井堂沢の中で、互いに近い所にありますから、おそらく「あい田分」のゑけ寺もこの近辺にあったんじゃないかというふうに漠然と考えていたのです。

ところがこの調査がきっかけで、それを彷彿とする地名をみつけることができたのです。図４は大河内家文書の中から見つけた、「松平丹波守様御預所信濃国筑摩郡會田町村」という江戸時代の絵図です。文化10年（1813）以後に描かれた絵図であります。なぜ文化10年以後かといいますと、この中の畑に「文化十年の書入」と申しまして、耕地起こしをして年貢を払う畑にしたという記述がありますので、1813年以後に描かれた絵図ということになります。この絵図を眺めていますとある部分に目が向きます（図５）。ちょっと南と北が逆になっていますけれど、上の方に「字殿村」と書かれておりまして、そして札（補陀）寺があります。左には長安寺があります。目を転じて下を見ると廣田寺が見えます。そしてその右に「字ゑげ」という地名が書かれているのお分かりになりますか。「ゑげ」という２文字が見えるんですね。ここで重要になるのは、この「ゑげ」と書かれた地名と、「お祓い配り日記」に登場する「ゑけ寺」との関係です。このお寺が「あい田（会田）」にあったことは間違いないので、周辺の状況から考えて、この付近にゑけ寺があった可能性が十分考えられるのではないかというのがひとつです。

もうひとつが廣田寺です。廣田寺は天正９年の段階ではまだ存在していませんが、寺伝からその前身は知見寺だったと言われています。そこで、知見寺がここに移って来て廣田寺という名前に変わった、そして

𡚁け寺がこの地にあったという前提に立つと、石積などの遺構が発掘された殿村遺跡は、札（補陀）寺、長安寺、廣田寺（知見寺）そして𡚁け寺という四つの寺院に囲まれていたことになるのです。そして西側を岩井堂沢で区切られている。そういう空間に殿村遺跡はあったということになります。ではこれがいったい何を示しているのか。まだ私たちはそこまで分からないのですけれど、地元歴史研究者である市川惠一さんは、もしそうだとすれば風水で四天王を示しているのではないかという興味深いお話をされておりました。このように四つのお寺に囲まれていたとすると、その関わりのなかで殿村遺跡の性格についてもまたいろいろ考える余地があるのではと思っております。

なお、「お祓い配り日記」の中にはお寺のほかにも、前回の講演で笹本正治先生がお話しされたように、

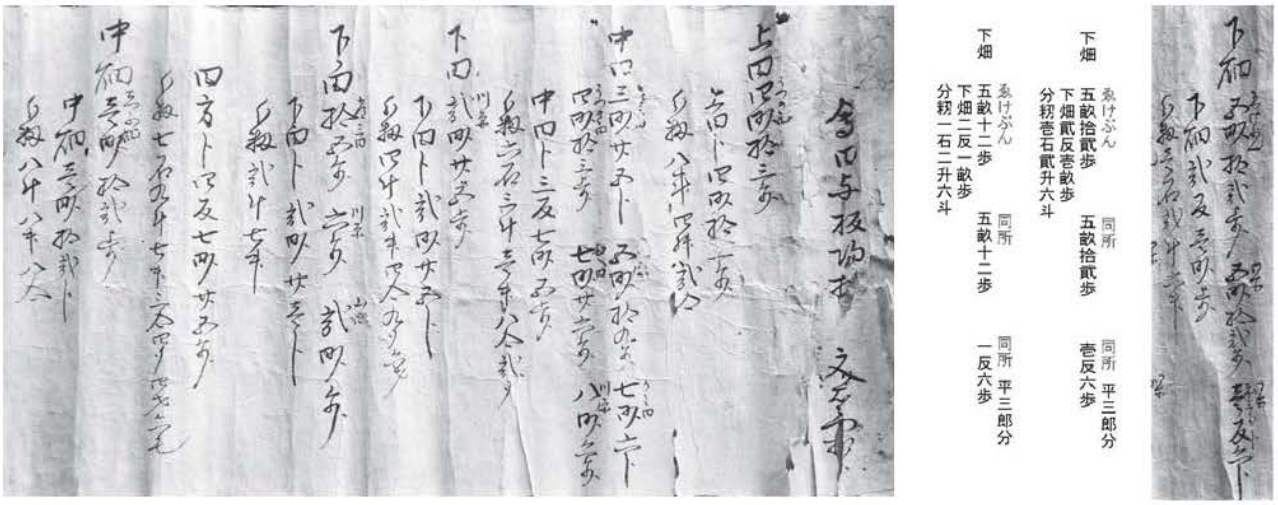

図６『会田与板場村　文右衛門控』と「𡚁け分」の記述（小口正治氏蔵）

宗教者と考えられる人の名前がのっております。お寺と同じようにあおのり、ふのりをもらっている人たち、「河原さきのりんすそ」とか「はんやう」とか、ちょっとどんな人たちなのかなと思うんですけど、宗教者と思われる人たちの姿も見えます。

こんな思わぬかたちで「𡚁げ」という場所が確認できました。しかし、「𡚁げ」が出てくるのはこれだけではなく、実は他の史料にもあるのです。

図６は小口家文書にあります「會田与板場村　文右衛門控」慶安５年（1652）のもので、ようするに文右衛門さんが所有する田畑の面積や等級あるいは年貢高を示したものなんです。その中に図８のような箇所があります。これをこのまま現代の漢字に直します。その中に赤で示した場所「𡚁け分」「同所」「同所」というのが出てまいります。「下畑　𡚁け分　五畝十二歩　同所五畝十二歩　同所平三郎分　一反六歩　下畑二反一畝歩　分籾一石二升六斗」と書かれております。さて「𡚁け分」とは何を表しているかと言いますと、その場所の名前を表しています。最後の平三郎分というのは平三郎という人の持ち分だと思いますが、なぜ「𡚁け分」が場所の名前を示しているかと言いますと、「𡚁け分」の下に「同所」と書かれています。同じ場所だよと。要するに江戸時代のこの段階では、かつては𡚁け寺の持ち分だったかもしれない畑なんですけれども、それが𡚁け分という地名に変化してしまっているわけです。特にこの文書を書いた人がそれを伝えようと意図はしていないんですけれども、こんなところにも中世の痕跡が残っている場合がある、そんな一例としてあげさせていただきました。

ではもうひとつの例に移ります。

図７は殿村遺跡の第１次調査の概報にのせましたが、大河内家文書の「會田郷往古之略図」、文禄３年（1594）ですから、もう中世の最終末ですね、その絵図の写しがありまして、それを私たちが再トレースしたものです。「會田郷往古之略図」「後の世の人のためにこれを記しますよ」というふうに書かれていて、い

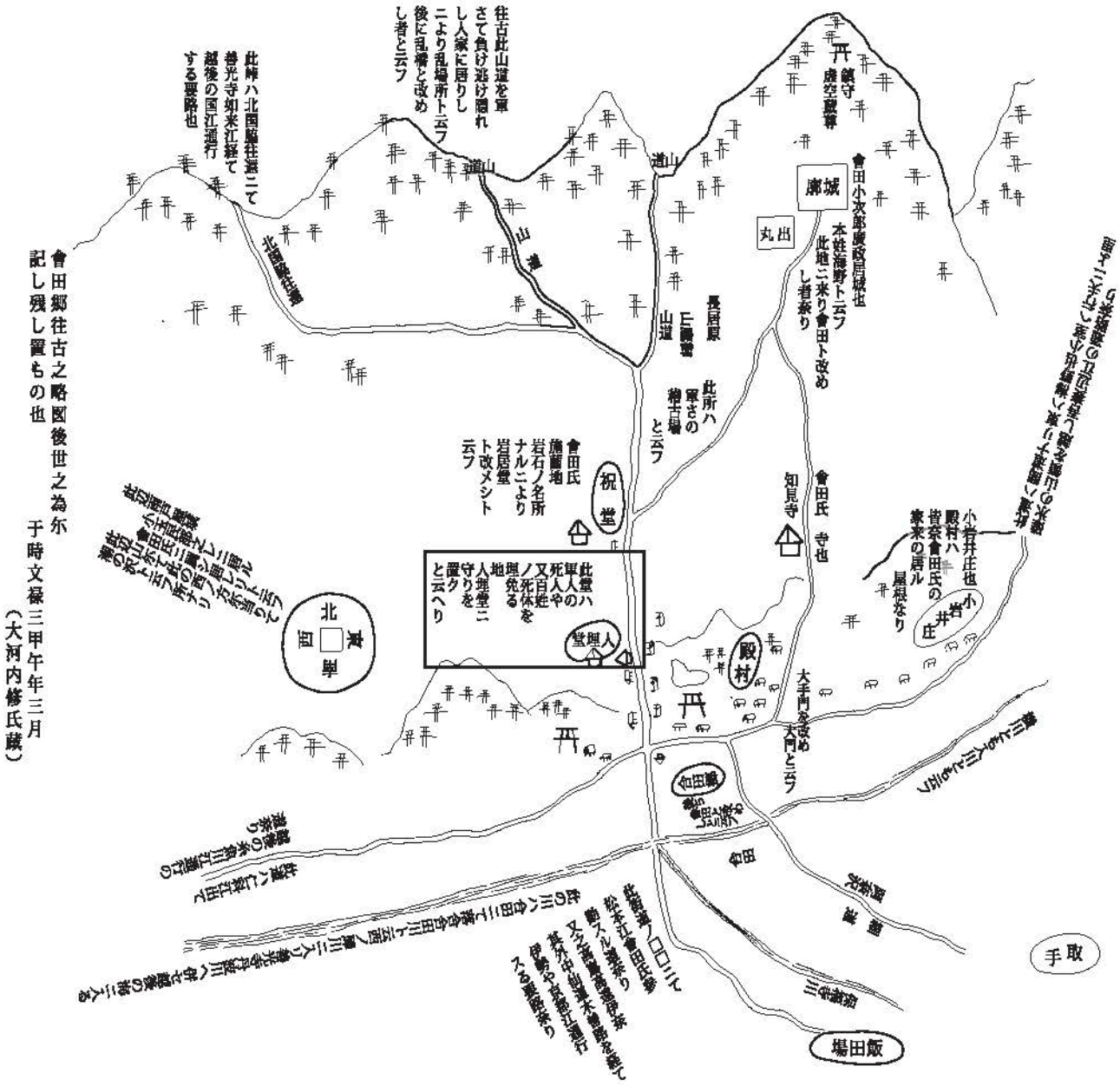

図７ 『会田郷往古の略図（写）』文禄３年（1594）とにごみ堂（原図をトレース）

図８ にごみ堂の遠景と宝篋印塔

ろいろな情報がここから得られます。この中で私たちが注目しましたのが図中に四角く囲んだ「人埋堂」と書かれた部分です。「この堂は軍人の死人やまた百姓の死体を埋める地　人埋堂に守りを置くと云えり」と記されています。かつてここにお堂が建っていた。そこに軍人の死人とか百姓の死体を埋めていた。文禄年間においてはすでにそれが普通だったということが分かるわけです。で、現在この場所を私たちは「にごみ堂」と呼んでおります。

図９　にごみ堂出土の板碑
（松本市立博物館蔵）

図８左が現在のにごみ堂の全景になります。新しい農道に沿って半島状に突き出した小高い地形をしている場所です。地元ではここが「にごみ堂」と呼ばれていることを、私たち殿村遺跡を発掘するようになってから知りました。このにごみ堂には現在どんなものがあるのでしょうか。墓地となっている小高い丘の中に入っていくと、一つには古い石塔があります（図８右）。特に注目したいのは写真右側の石塔で、これは中世の宝篋印塔と呼ばれるものです。しかしどうもいくつかの石塔のパーツを寄せ集めて重ねてあるような感じです。ほかにも墓石の前に宝篋印塔の相輪部分と思われるパーツがいくつも並んでいるのが見えます。また、松本市立博物館には、ここから出土したと言われる中世の板碑が展示されています（図９）。このようなことから、にごみ堂は中世以前までさかのぼる歴史の古い場所であることが十分考えられます。

このように、にごみ堂は名前からしても地形から見ても非常に興味深い場所なんですが、そう思ったのは私たち現代人だけではなくて、すでに何百年も昔の人たちが興味関心を抱いていたらしいことが分かる、実に面白い資料が見つかりましたので紹介します。

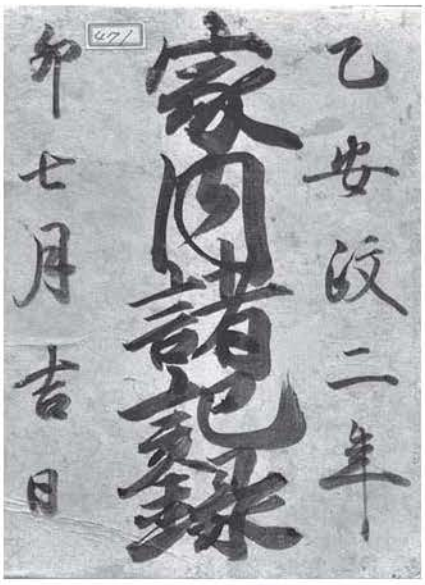

図10は堀内家で所蔵している「乙　安政二年卯七月吉日　家内諸記録」という日記です。安政２年は1855年になりますけれども、この記録の中ににごみ堂が出てまいります。まず記録について見てみたいと思います。日記の体裁は写真に示したとおりです。帳面の中ほどに絵が描かれているのが分かると思いますけれども、にごみ堂の記述の部分は、「安政７年２月24日」、「当日もにうみ堂掘りそうらえどもなにも出で申さざるよし、ただ出そうろうものはよほど古き骨のみだいぶ出でそうろうよし、場所図の如し」と書いてあります。ここでは「にごみ堂」ではなく「にうみ堂」という呼び方がされていますが、

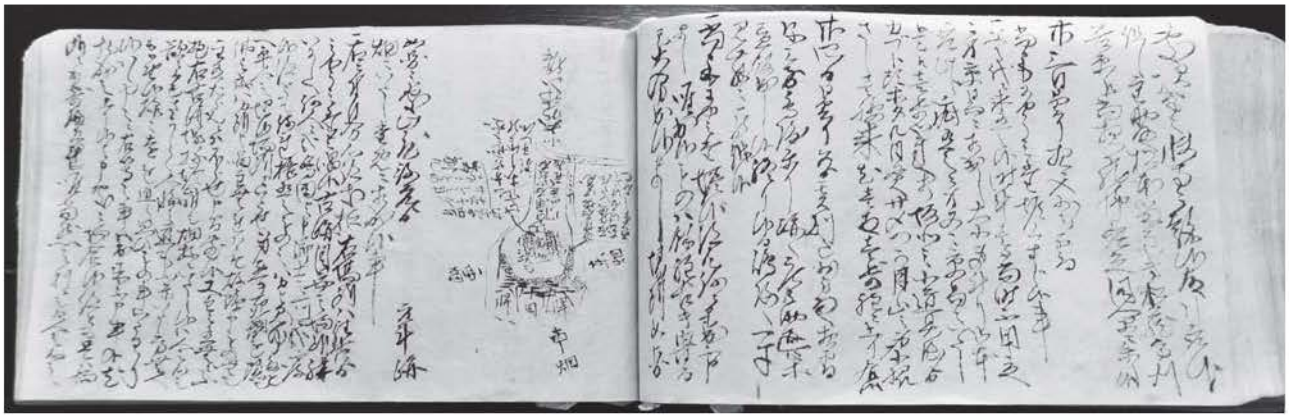

図10 『家内諸記録』表紙とにごみ堂の部分（堀内健氏蔵）

図11は絵の部分の拡大です。南北が逆になっておりますけれども、これはなんと江戸時代の人がにごみ堂を発掘した時の図面と言ったらいいのでしょうか。見取り図のようなものが描かれ、穴があると書かれております。そしてその周りは石積みになっている。また、この穴は「一円芝地の所を掘って出て来た」とも書いてあります。それで面白いのは、「この角の石は2枚石を門のごとく開き」と、まるで古墳の横穴式石室のような感じなんですけれども、そういう石積みで囲まれた穴がありました。しかもその中から死体がたくさん出て来たというから驚きです。ところで当時の人びとはなぜ発掘のようなことを行ったのでしょうか。実は、それは学問的探究心で行われたわけではなくて、何のためかというと、ここを拓いて畑にしようとしたわけですね。それで発掘は早々に終わり骨は元に戻され、穴も埋められて畑になります。その続きを見ますと、「畑にいたし堂免にあいなりそうろうこと」と書かれています。堂免というのは、お堂があったことによって免畑、要するに租税を免じてもらえる畑になったことを示します。そしてその後の部分ですけれども、「右につき自分心得だけひかえ、右場所は往古よりみゆうみ堂と唱えそうろう、古跡目安の場所ことに、いにしえ何人のや會田と申す郷士の一門にや存ぜずそうらえども何れ、格有りの者の墓と見ゆ」と書かれております。どういうことかと言いますと、会田氏かもしれないけれども、それなりに格の高い人の墓ではなかったのかなというふうに堀内家のご先祖は書き残しているのです。

ここに紹介した資料は日記で、すでに文禄の時代から死体を埋める場所、死人を埋める場所、そういう場所として定着し、皆が知っていた所について、それを記録として後世に残すために記された貴重なものなのです。日記というこのような近世の資料からも、中世以前の様子がうかがえる有益な情報を得ることができる。地域に埋もれた資料には、まだそういう可能性がたくさんあるんだということを、私たちはこの調査を通じて知ることができました。これもひとえに調査にご協力をいただ

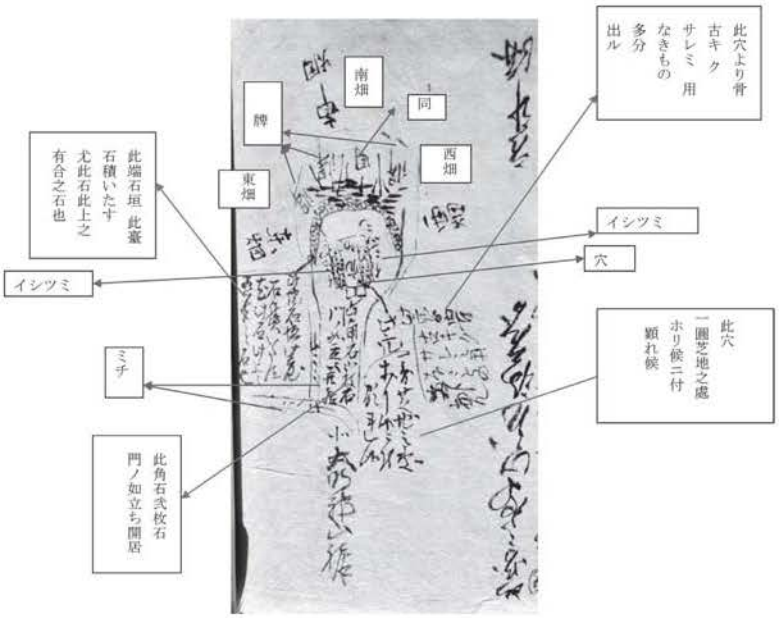

図11　にごみ堂発掘の見取り図

いた地域の皆様のおかげです。

私たちはこのように発掘調査から得られる情報以外に、すなわち遺物とか遺構といったもの以外でこの四賀地区にまだ眠っている資料を探し出し、所有者の方にお願いして写真等を撮らせていただいたり、またお話をじっくり聞かせていただいたりして、この殿村遺跡の総合調査の中で一つの柱となる資料として位置づけたいと考え、このような作業をしております。今まで寺社を含めて９軒の方の家を訪ねさせていただきましたけれども、皆さんいずれも親しく対応していただいて大変ありがたく思っております。現在のところ個人でご所蔵の資料は、40 件 47 点を調べさせていただくことができました。そして、お寺や神社に関係する資料は 309 件 340 点に達しております。こうして集まった資料を正確に読み解くため、古文書の専門家にも全面的な協力をいただいています。具体的には、解読した内容を写真とともに文書データにしてパソコンに保存し、聞き取り調査で録音した内容はすべて文字に起こして文書ファイル化する。そういった方法で貴重な資料を後世に残し、また調査の参考にさせていただこうと考え、発掘調査と並行して少しずつ作業を進めています。

最後に皆様にお願いがあります。きょうお集まりの方で昔の資料をご所蔵の方はいらっしゃいますか。よく「うちの資料は大したことないから」と言われる方がおられますけれどもそんなことはありません。そこに何がひそんでいるか分かりません。資料の一つひとつすべてが素晴らしいものばかりです。一つひとつが本当に貴重な内容をもつものなのです。江戸時代のものでも明治・大正時代のものでも、その中から何を拾い出せるかは内容を読んでみなければ分からないのです。そこで資料をご所蔵の方がいらっしゃいましたら、ぜひとも私たちにお知らせいただきたいのです。皆さんのふるさとの歴史を皆さんが主役となってひもとくためにも、ごひご協力をお願いします。

調査報告はこれで終わりにさせていただきます。どうもありがとうございました。

当日の周知ポスター・ちらし

とのむらさん
この年に考案した遺跡に住む妖精をイメージしたキャラクター
殿村遺跡の各種イベントで登場